

観天 望気

有機農業は「農の原理」

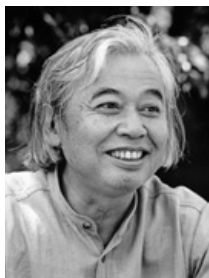
農林水産省の「みどりの食料システム戦略」では2050年までに有機農業を全耕地面積の25%（100万^{ヘクタール}）に増やすという。とてもいいことだ。未来の構想は大いに語ろう。しかし、なぜ有機農業をめざすべきなのか、その本質には踏みこんでいない。「環境負荷が少ない」「持続可能性が高い」と言うばかりで、「これが農業のあるべき姿である」という根拠を表現していない。実現方策も、スマート農業などの「技術革新」に下駄^{げだ}を預けている。

「農とは、こういうものだ」という原理・本質を示して、「なるほど、気候変動対策であろうとなかろうと、そういう農業をめざすべきですね」という国民の価値観に訴えたいものだ。

私は「有機農業」とは、「天地自然を傷つけない百姓の生き方」だと思う。もちろんその天地自然には、百姓自身も、土も、風景も含まれる。もちろん作物だけでなく、ただの虫・ただの草などの田畑とそのまわりのすべての生きものも含む。傷つけてはならないのは、天地自然への感謝の気持ちや、生きものへの情愛、さらには生きもの同士の感覚、そして「いのち」の引き継ぎを、天地自然の力を借りておこなうこと、などである。

百姓ほど生きものを殺す仕事はない。耕せば、草は死ぬ。水を干せば、水の中の生きものは死ぬ。収穫すれば作物を食べていた虫は死ぬ。そもそも農とは、百姓が育てた生きものを食べるために殺している。こんなに生きものを殺しているのに、百姓が悩まなくていいのはなぜだろうか。生きものが「かえって」来てくれるからである。「また会える」からである。じつは「持続可能」とは、このことである。「環境負荷」とは、この「いのち」の軽視が真因である。

生きものの「いのち」がちゃんとかえってくるような仕事と技術を身につけたい。天地有情の世界に満ち満ちている「いのち」を、百姓が責任を持って引き継ぐ。だからこそ食事もおび^{おび}た^たも含めて、人間は夥^{おびただ}しい「殺生」を克服してきたのではなかったのか。



宇根 豊
百姓・思想家

うね ゆたか

1950年生まれ。78年福岡県の農業改良普及員時代に虫見板を使った減農薬稲作を提唱。89年に就農。農と自然の研究所代表。農学博士。著書に「うねゆたかの田んぼの絵本」（全5巻）『百姓学宣言』『愛国心と愛郷心』（以上、農山漁村文化協会）、『日本人にとって自然とはなにか』（筑摩書房）などがある。